

長塚圭史さん WS 参加俳優さんのご感想

2018年3月28日～30日、国文学研究資料館オリエンテーションルームにて、長塚圭史さんとWSを行いました(詳細は「古典インタプリタ日誌」をご参照ください)。

参加したのは、様々な経歴をもつ俳優さん8名と、国文研の研究者たち。

初めて国文研へ来館した俳優さんたちは、このWSでどのようなことを感じたのでしょうか。WS終了後にお送りくださった感想を公開します！

参加俳優(敬称略、五十音順)：坂本慶介／菅原永二／成河／高木稟／
引間文佳／藤間爽子／八十田勇一／李千鶴

■ 坂本慶介 ■

・WSに参加する前に思っていたこと。

1つ目は本について。本には妙な力があると思っています。多くの人にある事と思いますが、何度も読んだのに、時々パラパラとめくったり触ったりするために部屋に置いてある本があります。「文庫本を手にしている自分」という客観的な何かは全く無いです。自分の思いや感覚がとじ込まれている気がするのだろうと予想しています。

もう1つは、“古典”というものと自分との距離について。わからないものとして早々に遠ざけてシャッターを降ろすか、意外に共通点が多いことを知り自分の中にやたらと近づけようとするか、極端な関わり方をしているなと思いました。

もう少し楽なスタンスは無いのか、

そんなことを抱えてWSに参加しました。

・空間と本について

まず衝撃だったのが、空間と本です。たくさんの人が触れ、においが染みついて200年以上時を重ねているものが、最先端の綺麗な建物の部屋の机の上にポツンとあるということが笑ってしまう位に強烈でした。次元が歪むし、手に取ると言葉には変えづらい何かを感じることができました。次元が歪むが精一杯です。あの感覚を表現、共有できたら究極なんだろうなと思いました。

・知る事の深さについて

プリントにしろ何にしろ、知識を入れているときに普段のもう一步深い(細かい)ことを知ると面白いなと思いました。深くすればするほど明確さは失うけど、必死に埋めていく過程から様々なことが生まれたし、思ったし、飛躍していきました。ここは、現代に生きる僕らが古典に関わる、表現する上で重要なポイントになると感じました。飛躍して古典から離れていったとしても、何か漂うものになるというワクワク感がありますので。

・黄表紙について

僕個人のことでいうと、最初から漫画があるし、長編も短編も自由に選べるので、「黄表紙ページ少ないな」とすぐに思いました。でも当時手にしていた人たちはどう感じていたのか、本との関わり方が違うはずなので難しい事ですが、掴みきれませんでした。現代の漫画の感覚で言えばものの数秒で読み終わってしまうあの本をどのように楽しんでたのか、

いずれ長編が登場するまでの黄表紙と読者の関係はまだ面白そうです。その人となりが解れば、ものすごい拡がりそうな気がします。1つの本の流れを丁寧に追っていけば何か見えて来そうな気もするし、根本的に全く相違がある気もするし、面白いです。

と同時に、違う時代を生きていて、本へのスタンスが江戸の人達とは恐らく異なるであろう現代の人間に読まれ、触られる黄表紙側の視点もとても良いなと思います。黄表紙が今の本を見て何を思うのか、そこから人の事が見えだしそうな感覚もありますし。

・まとめ

WS前後で何か答え合わせができたということは無いけれど、自分の中に色々なことが流し込まれた感覚が明確にあります。解ろうとすること、あいまいなこと、その間の感覚とを混在させたままの今この日の感覚(WS翌々日の夜)が、演劇的に関わる自分としては間違っていない。演劇的に関わることと古典を広めるということは相当密接である。この2つはまとめとして書くことができました。まずはそれぐらいで良いだろうと思っています。

■ 菅原永二 ■

ないじえる芸術共創ラボ。

大変貴重な機会に参加させていただき光栄でした。

国文学研究所でのWSと聞き、さぞかし敷居の高い所だろう、難しい題材だろうと勝手に想像していたのですが、先生方の親しみやすいキャラクターと今回のWSに用いられた黄表紙本のわかりやすい説明のおかげで終始リラックスして臨むことができました。

黄表紙本は初めて拝見したのですが、現代の漫画本に通ずるものが多々あり、非常に興味深かったです。

主人公が、愛すべき愚かなキャラクターで欲にくらんで失敗を繰り返したり、うまくいっていたことが夢だったり、今読んでも全く難しくない話で、モテる、有名になる、金持ちになる、権力を持つ、昔も今も欲は変わらないのだなと感じました。

短い時間でしたが、当時の知見を得られ、尚且つ演じることができて、大変有意義なWSでした。

またゆっくりと深く参りましょう。

ありがとうございました。

■ 成河 ■

先日はお世話になりました。二日間だけの参加でしたが、実は次の日起き上がれないほど体がダルくて、以来今日まであまり褒められない生活を送ってしまいました。それほど充実した集中力と瞬発力を要する時間でしたし、未知のものと出会う精神的な高揚も伴い、まさに役者冥利に尽きる、そんな幸福な時間でした。演劇人たちだけで集まってそれまでの方法論を精査したり新しく模索する、そういうワークショップは過去に何度も経験がありますが、今回、研究者の先生方の生のお声を聴きながらその場で感じたものを形にしていく、という作業はとても新鮮で刺激的でした。何よりも先生方の古典籍に向ける愛情に魅了され、それに突き動かされる瞬間が沢山ありました。過程として出来上がった形に対して、演劇人たちだけでは持ちえない視点をその都度聴くことが出来たのも大きな発見でした。そういう意味では、これまで参加したことのあるワークショップの中で最も風通しの良い現場だったのではないかなと、個人的に思います。何かを表現するためにはある「必然性」が必要で、先生方から発せられるその必然性をお借りして、自分を、場を刺激することがとても心地よい時間でした。本当にありがとうございました。

これは演劇の側の問題なのですが、演劇ワークショップは、本来であれば「寄り道」であるにも拘わらず、主に予算や興行の都合で「目的優先」に取って代わられてしまうことが多くあります。「公演目的」を持つことは大切なことですが、それ以上に、五十年、百年先の演劇芸術を考えるための時間を持たないものか、というのが僕たちが常日頃から抱えるジレンマです。そして、現代演劇が抱える大きな問題のひとつに「言葉」の問題があります。それが「伝統芸能」と「海外翻訳劇」と「現代口語劇」とを分断しています。僕たち演劇人が古典籍に触れて改めてその言葉を現代に翻訳してゆくという作業は、その分断を少しでも埋める可能性のあるもので、一過性の公演目的に留まらず、恒常的に取り組むべきものなのだという認識を改めて強く持ちました。今回のこの幸運な出会いが、その礎となることを心から願わずにはられません。どのような形であれ、僕たち演劇人と国文学研究の方々との共同作業が、お互いにとっての「生きた翻訳」を産み出す土壌となりますように。そしてその一助として貢献出来るのであれば、現代を生きる俳優の一人として、それは何よりの喜びです。書庫で触らせていただいた、お盆になった木版の感触とその愛嬌が忘れられません。またお会いできる日を楽しみにしています。

■ 高木稟 ■

始まる前、古典籍、草双紙、黄表紙

この耳慣れない単語に、

自分についていけるのか？という思い。

ワークショップが行われる部屋に入って、本物があることに驚く。

これが、古典籍…。ガラス越しじゃない。しかも、手にとって見てもいい。

恐る恐る手を伸ばす…軽い。

これらは再生紙を使っていて、いろんなものが紙のなかに混ざっている。

髪の毛が入ってる場合もある。という説明を聞いた次の瞬間、隣で見っていた人が毛を発見。興奮した。

そのあと自分が手にしたものにも毛を発見。興奮した。

江戸時代の人のものだと思うと、この毛は、どういう経緯で、何年ここに居るんだろう？

職人のものなのか、たまたま通りかかった人のものなのか、紙を溶かす段階で既に挟まっていた、鼻をかんだ人のものなのか…。

古典籍…貴重であることは確かだけど、なんか、とても身近に感じた。

と、同時に、いや、これは“紙を見る会”ではない…。

どんなことが書かれているのかな。

挿し絵ではなく、絵の説明でもなく、絵と文字が同列なのがすごい。

文字も絵として、絵も、文字として捉えているかのような。

くずし字が読めないから余計にそう感じるのか。

雨の降跡とでもいうのか、雨の表現に文字を使ったものもあると聞いて、あ、これはもう完全におもしろい。

台詞もおもしろい。

的中地本問屋

折鞍で作業してる小僧や

朝比奈、景清の台詞。

この役やりたい。

どんどん身近に感じる。

版木を触らせてもらったのもよかった。

想像より彫りが浅い。硬い木なのか？

桜の木を使うことが多いというのを聞いて、スマホをスリスリしてみると、

山桜の木は、目が細かくて刃が入りやすい。とあった。

硬さはわからなかったけど、触らせてもらったあの感触と、桜の情報で、前よりは明確にイメージできる。

よりイメージしようと、いただいたプリントを丁合いしてみたところ、江戸生艶気樺焼はまだいいけど、

的中地本問屋は絵がずれて失敗した…。

いろいろ触れたり、考えたり、動いたり読んだりした結果、古典籍との距離感がかなり縮まった。

ありがとうございました。

これからもよろしく願いいたします。

■ 引間文佳 ■

私の中で古典籍のイメージはもっと小難しく、今回取り組んだ黄表紙のような現代の漫画の先祖に当たるものがあることを知らなかった。また黄表紙には、武士が書いた簡単なものもあれば、北斎や国芳などの浮世絵も使用されているなど、なんと豪華な漫画なのだ。そこに皮肉と

ユーモアが入り混じったお話が書かれていることも、江戸の人たちの工夫が今の世の中の私にも同様に楽しめたので、現代と繋げて考えることも出来そうだなと思った。的中地本問屋を実際に動いて即興でみんなでワークしたことで見えてきたのは、一冊の本を作る工程の中でも決まった動きがあるので、その動きを今回は道具や紙が拡大していくことをやったりしたけれど、例えば刷る紙の厚さが変化したりだとかすると、刷りかたも紙の触り方ももっと丁寧になったり変わってきそうだなと思った。同じように掘る板木の硬さなど色んな可能性を考えてみたい。紙や板木の種類について調べて見ようと思う。動きやみんなと動いていくときにもっとどんな面白いことが出来るか次回に向けて考えていきたいと思う。

■ 藤間爽子 ■

ワークショップに参加することになり、はじめは正直何をするのか、どんな内容なのか、全くわからず不安な気持ちがありました。事前にホームページを見ても、難しそうな古書の説明や、くずし字の写真等が載っているばかり。演劇や動きと何を結びつけていけるのだろうか？最終的にどう行き着くのだろうか？とハテナのままで初日を迎えました。しかし、最初は点と点でしかなかったワークショップの内容が、3日間のワークショップを終えてみると、一本の直線に繋がったように思えました。敬遠してしまっていた古書のイメージが自分の身近なものに思えてきたのです。動いてみて、実際に触れて、見て、初めて気付く発見も多くありました。頭だけでは理解しづらいことも、動く行為によって身体から理解ができた不思議な感覚でした。今回長塚さんは黄表紙など、本の内容よりも、本を読むという行為自体、本を作る過程に着眼点を置いていたのがとても面白く感じました。黄表紙を作る作業を演じる時、時間の経過をその場で一周まわって「1時間経過…」と表現していましたが、今ならボタン1つで印刷完了！で終わるのになあなんて見ていました。今は電子書籍など、本も便利を追求されていますが、江戸時代は1つの本を制作するのにたくさんの時間と多くの人が携わっていたことに、改めて本の温かみをおぼえます。当時の人たちと私たちの生活での流れる時間のスピードや価値観は全く違ったものなのではないかと、演じて考えさせられもしました。また、黄表紙を音読してみると、意味以上に音の並びが、とても心地よかったり、登場する人物の女房がちんぷんかんぷんなのに、なぜか愛おしかったり、和紙をめくる行為になんだか心動いたり。そういった言葉で説明できないけれど日本人なら誰もが「なんだかいいなあ」と思われる感覚を大切に毎日を過ごしたいと考えます。

■ 八十田勇一 ■

圭史君に声をかけてもらい今回のWSに参加しました。今回はまず第一歩、古典籍をもちいての演劇的表現は可能か否かを探る段階でしたが、先生方から黄表紙の魅力を聞かせていただきまして、その中身の面白さもさることながら、特に製本の工程に多くの人々が関わっていることがとても興味深かったです。二百年前の製本ですから、手彫りの版木を刷って手縫いで紙を縫うという工程は想像できます。でも、実際はどうやっていたのか？その問いかけが、演じる仕事をしている自分にとって古典籍との距離を縮めてくれました。その現場は職人たちの会話が飛び交っていてとても賑やかだったのか、或いは社員全員がパソコンに向かう現代のオフィスのようにシーンとしていたのか。ベテランもいれば新人もいる、仕事熱心な職人もいれば、そうでない職人もいる。先生方に彫刻刀の持ち方や色々と当時の技を教えてくださいながらエチュードを試みると、当時の人々のキャラクターや人間関係に想像が膨らみました。しかも保存されている貴重な黄表紙を見せていただき、その軽さや絵と文字の細かさに驚きました。本物に触れることで、出版を心待ちにしていた当時の読者たちにも想いを馳せることができました。

次回のWSでも自分たちがどんな表現ができるか引き続き探ることになるのでしょうか、今回よりも具体的に、形あるものへ近づける気がします。

■ 李千鶴 ■

国文学研究資料館という場所に入った瞬間、その空気感に背筋の伸びる思いがあった。私は神保町に行くのが好きで、古本屋をまわり、喫茶店でコーヒーを飲みながら本や古い雑誌、写真集を読み、カレーやナポリタン、ロシア料理を食べ、そしてまた喫茶店でコーヒーを飲む。でもそこで草双紙を探したことも、発見したこともなかった。ワークショップ1日目、会議室に入ると古典籍が並べられていて、見るからに貴重であるその本たちに恐る恐る触れ、心もとない破れてしまいそうなページを一枚ずつめくる時、その時代の人たちと触れ合うような感覚がありときめいた。先生方から草双紙とは当時の再生紙で作られているもので、鼻紙や、その家々で出たゴミをリサイクルし、また紙にしているから「臭い本」という由来もある、とのお言葉。「世間で臭草子といわれているこの冊子は、表紙にいたるまで、ほご紙などを薄く漉きかえした紙を使い質の悪い墨のおいがするので、臭草子というのだ」今より古典的であったであろう紙のリサイクル技術。その時代の髪の毛を見つけた時の現代の私たちのあの盛り上がり。当時の人たちとの距離が近づいた気がしてタイムスリップ感にドキドキした。江戸時代なんて聞くと遙か昔の物語だが、本に書かれている人間は、ずる賢さやユーモア、生きる姿勢など、現代の私たちと変わらなく思い嬉しくなった。物語や構成、仕掛けも面白い。現代の手法とも繋がっているように感じ、エ

ンターテイメント性もある。そして絵の綺麗さ、細かさ、デザインの力にも感動した。国芳国貞展を見たときの、江戸のポップカルチャーのデザインの力に衝撃を受けたことを思い出した。お洒落で、パンクでかっこいい。色彩表現やデザインは、現代のアーティストに多大な影響を与えているんだなと改めて発見があった。本を作る工程の大変さにも胸を打つものがあり面白かった。（横尾忠則が浮世絵版画にはまり、実際に刷り師と呼ばれる人達と作品を作っていた話を思い出した。未完成の完成絵画を沢山描いていて、過程を見せたかったと。横尾さんの未完への想いの真意とは違うと思うが、わかる！過程が面白い！と勝手に共感…。） ワークショップで実際に本を作る工程を作ったとき、工程の大変さのため息が出たことはさることながら、その彫り師は何を考へながら彫っていたのだろうか、紙を折っている人はどんな人物なのだろう、綴じながらどんな話をしていたのだろうか、効率を上げるために彼らも試行錯誤し、こう工夫したはずだ！と、その当時の人々に思いを馳せることになった。演じることでよりリアルに想像することによって、その時代に足を踏み入れ、そこで起きている出来事が、物語が他人事ではなくなり、親近感が湧き、そこで生きる感覚が湧いてくる。彼らのことをもっと知りたくなった。そして実際にそのシーンを作った後は、自分も既にこの本を作った一人の気分になってしまったので、この本がこの先どこに行くのか、前よりも気になるようになる。出来上がった本がこの後本屋に買われ、貸本屋でたくさんの人が同じ本を読み、当時の人の会話があり、評判があり、そこから巡り巡って今 2018 年の自分が国文学資料館でこの本を手に入れているという事がとても感慨深く、ロマンを感じた。古典籍にはその時代背景があり物語があり、作者がいて絵描きがいて、作る工程があり、作っている人がいて読む人がいてその人々の生活があり、そしてそれを今読む現代の私たちがいて、全てに物語がある。私たちのその時代への好奇心、時代が違うからこそその無限の想像。当時の人々と現代とをつなぐ世界を、演劇を通して俳優として、もっと想像したいと思った。そしてその表現の方法ももっと探りたいと思った。便利になった現代、本の形態も変わっていく今、あの頃と何が繋がっていて、そしてどこに行くのか、何が失われたか、何を得たか。進化なのか、後退なのか。何を叫びたかったのか。そんなことも掘り下げてみたくなった。このワークショップに参加でき、古典籍に出会えてよかったです。先生方のお話を聞きながら、創作する、贅沢で面白い貴重な体験でした！俳優としての課題も残りましたが、今、突破口も見つけたような気がしています。このプロジェクトがどう進んでいくのか楽しみです。今後も関わっていけたら幸せです！次回神保町で黄表紙を探すのが楽しみになりました。ありがとうございました。